

古写真と絵図類の考察からみた鎮守の杜の歴史

小椋純一

The History of Shrine Groves Viewed from Old Photographs and Pictures

OCURA Junichi

はじめに

① 古写真からの考察

② 絵図類からの考察 おわりに

【論文要旨】

今日、関東地方低地部を含む日本南部における典型的な鎮守の杜は、常緑広葉樹林（照葉樹林）であり、それは古くから人の手が入ることなく続いてきたと考えられることが多い。しかし、明治期以降の文献、地形図、写真をもとにした考察から、そうした通念は誤ったものである可能性が高くなってきている。ただ、これまでの考察事例はまだあまり多くはなく、かつての神社の杜が一般的にどのような植生であったかを述べるには、もっと多くの事例を検討する必要がある。そこで、本稿においては、古い写真や絵図類を主要な資料として、かつての神社の杜の植生について、より多くの事例を検討した。

古い写真としては、『京都府誌』（一九一五）と『日本写真帖』（一九二二）に収められた神社の写真を、主に現況と比較しながら検討した。その結果、それらの写真からわかる神社の杜の植生は、一部には今と大きく変化していないように見えるものもあるが、多くの場合、今日の状態とは大きく異なっていた。すなわち、今日では神社

の杜の植生には、クスノキやシイやカシなどの常緑広葉樹が主要な樹木となっていることが多いが、明治末期から大正初期にはスギやマツなどの針葉樹が重要な樹木として多く存在する傾向があった。また、神社付近の樹木は、今日よりも少なく、また小さいことが多い傾向があった。

一方、絵図類については、幕末に発行された『再撰花洛名勝図会』（一八六四）と初期の洛中洛外図四点（一六世紀初期～中期）に描かれた神社の杜について、主に同時代に同じ神社を独自に描いた図の比較検討により、絵図類の写実性を検討しながら、それぞれの時代における神社の杜の植生について考えた。その結果、かつての神社の杜の植生は必ずしも「様ではなく、神社により大きく異なっていたが、概してマツがある程度見られるところが多く、またスギが神社の杜の重要な樹種であった場合が多かった。また、一部には常緑広葉樹の割合が大きかったと思われる神社もある。

はじめに

今日、鎮守の杜（神社林・社叢⁽¹⁾）には、ふつうの森林には見られない珍しい樹木や巨木などがしばしば存在する。関東や関西地方低地部を含む日本南部における典型的な鎮守の杜は、常緑広葉樹林（照葉樹林）であり、それは古くから人の手が入ることなく続いてきたものと考えられることが多い⁽²⁾。

しかし、明治期以降の文献、地形図、写真をもとにした考察から、そうした通念は誤ったものである可能性が高くなってきている。たとえば、関東地方の社寺林の明治前期における状況については、初期の近代的地形図『迅速図』の測図と同時に作成された『偵察録』の記述からも知ることができる。それによって、その神社の植生に関する多くの記述から、明治初期における関東地方の神社の杜には、大木や老木がしばしば見られたものの、その樹種はマツ、スギ、ヒノキが中心であり、カシやシイやクスノキなどの照葉樹は多くなかったものと考えられる⁽³⁾。あるいは、鎌倉の鶴岡八幡宮や京都の八坂神社など、古い写真が残る神社では、検討例は少ないものの、それら神社の杜のかつての植生は主にマツやスギである場合が多く、常緑広葉樹の杜が多い今日とは大きく異なっていたことがわかる場合もある⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾。また、明治後期の地形図（正式二万分一）をもとに、滋賀県の神社周辺のかつての植生を考察した研究では、針葉樹が中心の杜をもつ神社が多かったと考えられている⁽⁷⁾。

一方、明治期よりも前の神社の植生についてわかる例もある。たとえば、東京都府中市にある大國魂神社については、文化十二年（一八一五）の社叢調査の詳しい記録などが残されており、たとえば文化年間の調査時には、その神社の樹木の八割近くがスギであったこと、また本殿裏にはケヤキが多かったことがわかる⁽⁸⁾。また、大阪府豊中市の春日神社の杜

は、今はシイの木が多い林となっているが、江戸時代にはマツ林であったことが文献や絵図からわかる⁽⁹⁾。あるいは、古い絵図類の多く残る京都の八坂神社では、それらの絵図類の考察から、江戸中期から晩期にかけては、マツやスギが中心の植生であり、今日のクスノキを中心とした植生とは、やはり大きく異なっていたものと考えられる⁽¹⁰⁾。また、さらに時代を遡る鎌倉期などでは、史料は少ないものの、残された絵図などから、スギがその神社の重要な樹木となっていたと考えられる⁽¹¹⁾。また、島根県の出雲大社では、同じく鎌倉時代の絵図の描写などから、その時代にケヤキが本殿付近の重要な樹木として存在していたものと考えられる⁽¹²⁾。

ただ、かつての神社の杜が一般にどのような植生であったかを述べるには、もつと多くの事例を見る必要があると思われる。しかし、たとえば、『偵察録』からの考察では、関東地方の事例は多くわかるが、その他の地方のことはわからない。また、古い写真や絵図等からの考察例も、まだその数は少ない。

そこで、本稿においては、かつての神社の杜の植生を一般的により明らかにするために、古い写真や絵図類を主要な資料として、より多くの事例を検討してみたい。

① 古写真からの考察

神社を撮影した古い写真があれば、それが撮影された時代における神社の杜の植生を知る貴重な資料となる。ただ、かつて写真は貴重なものであり、数十年以上前の写真が多く残されているわけではない。それでも、よく知られた神社については、いろいろな目的で撮影された古い写真が比較的多く残されている。

ここでは、大正四年（一九一五）に発行された『京都府誌』⁽¹³⁾、また明治四五年（一九一二）に発行された『日本写真帖』⁽¹⁴⁾に収められた神社の

写真を、主に現況との比較を中心に検討してみたい。

(1) 『京都府誌』に収められた神社写真からの考察

大正初期に発行された『京都府誌』(一九一五)には、京都府の沿革や地誌など、さまざまなことがまとめられているが、その中には神社についての項目もあり、京都府内の主な神社の写真が収められている。それらの写真の撮影年は定かではないが、その本が発行される少し前に撮影されたものが多いと思われる。ここでは、そこに写真が掲載された神社のうち、現在の京都市域に位置し、本が発行された大正初期の神社周辺の植生を知る手がかりになると思われる十四の神社の写真を検討する。また、比較のために、近況を観察し、古い写真が撮影された地点、またはそれに近い視点からの近況写真を撮影した。なお、そうした近況写真との比較から、古い写真に写った樹木の大きさなどがわかることも少なくない。一方、大正初期における神社の社の植生を考える上で参考となると思われる明治中期の二万分一地形図(仮製地形図¹⁵)と『京都府地誌』¹⁶の記述も適宜示す。

① 建勲神社

『京都府誌』の写真(写真1)では、建勲神社の社殿周辺の木々は全般に樹高がさほど高くないように見える。またその中で比較的樹高の高い木々はマツが多いように見える。本殿裏の木々もマツが中心で、樹高は高いものでも本殿よりも少し高い程度と思われる。

また、写真2は、二〇〇五年の晩秋に写真1とほぼ同じ視点から撮影したものである。近況では、手前のシダレザクラなどのために先が見えにくくなっているが、晩秋で葉が少ないため、本殿付近の様子もある程度見ることができる。別の視点から見ると、その本殿周辺にはクスノキ、アラカシ、コジイなどの常緑広葉樹が多く、落葉広葉樹はわずかしかな

い(写真3)。また、一部に針葉樹のヒノキやツガも見られる。樹木は、大正初期と比べると全般に密度が高く、また高木化している。



写真1 建勲神社 (『京都府誌』より)



写真3 建勲神社 (2005年11月撮影)



写真2 建勲神社 (2005年11月撮影)

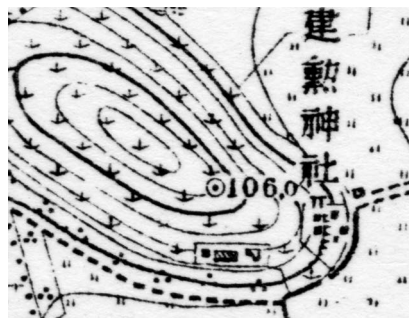


図1 建勲神社付近
(仮製地形図を部分拡大したもの)

このように、建勲神社付近の植生は、ここ九十年余りでたいへん大きく変化している。なお、明治中期の仮製地形図では、この神社付近には松林(小¹⁷)の記号が多く見られ、また一部に茶畑の記号も見られる(図1)。一方、明治十年代の『京都府地誌』には、この神社がある舟岡山につい

て「船岡山 山ノ七分松樹茂生シ三分ハ櫟桃茶林園ナリ」と記されている。これらの資料からも、かつて建勲神社周辺には小さなマツが多かったものと考えられる。

②北野天神

『京都府誌』の写真(写真4)では、社殿の右手にはマツ、左手にはウメと思われる樹木が見える。また、左上方には、わずかに広葉樹の一部が見える。

写真5は、二〇〇五年の晩秋に写真4とほぼ同じ視点から撮影したものである。近況でも、その社殿の右手にマツ、左手にはウメがある。ただ、その大きさなどから、それらは大正の写真に見えるものとは別のものであると思われる。一方、社殿の背後左側上方にはクスノキなどの広葉樹がだいぶ頭をのぞかせた状態となっている。写真ではほとんど見えないが、その社殿の背後には、クスノキのほかイチヨウ、エノキ、オガタマノキ、スギ、ヒノキなどの樹木がある。

北野天神については、ここ九十年あまりで植生は一見さほど大きく変

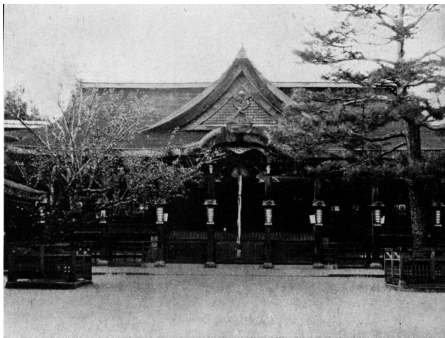


写真4 北野天神(『京都府誌』より)



写真5 北野天神(2005年11月撮影)



写真6 平野神社(『京都府誌』より)



写真7 平野神社(2005年11月撮影)

化していないようにも見えるが、写真で見える本殿背後の樹木は、大正初期と比べると、だいぶ大きくなっている。なお、『京都府地誌』には、北野天神の植生に関して「境内地古樹大木アリ梅特ニ多ク…」と記されている。

③平野神社

『京都府誌』の写真(写真6)では、社殿の背後には広葉樹中心かと思われる高木が多い。その樹幹は概して細長く、林は比較的明るい状態のところが多いように見える。ただ、写真の左上方には、一本だけかなり太く通直な樹幹らしきものが見える。その上部が見えないため、はつきりとはわからないが、おそらくマツなどの針葉樹と思われる。

写真7は、二〇〇五年の晩秋に写真6に近い視点から撮影したものである。近況では、社殿の背後はシイヤクスノキを中心とした照葉樹の林となっている。また、その一部にムクノキなどの落葉広葉樹もある。また、写真では見えない右方(北側)には、モウソウチク林もある。

樹林は、大正初期と比べると全般に常緑広葉樹林化が進んでいると思

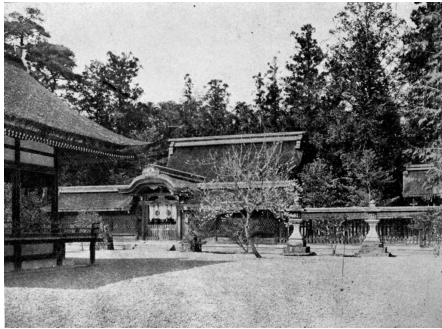


写真8 梅宮神社(『京都府誌』より)



写真9 梅宮神社(2005年11月撮影)

また、写真の左上方にはマツが少し見える。写真9は、二〇〇五年の晩秋に写真8とほぼ同じ視点から撮影したものである。近況では、社殿の背後には、ヒノキやスギの間にクスノキやオガタマノキなどの常緑広葉樹が見える。大正初期と比べると、常緑広葉樹の割合が大きくなっている。なお、本殿背後の樹林には、クスノキとともにケヤキなどの落葉広葉樹も少なくない。また、本殿手前の二本の常緑樹はクロマツ、右手下方の落葉広葉樹はウメである。

『京都府誌』の写真(写真8)では、本殿の背後には一部に広葉樹らしき樹木も見えるが、そのほとんどはスギかと思われる針葉樹である。また、写真の左上方にはマツが少し見える。『京都府誌』には、この神社について「現今社地櫻樹数十株ヲ列植ス」の記述が見られる。

④梅宮神社



写真11 大原野神社(『京都府誌』より)



写真12 大原野神社本殿裏の社(2005年11月撮影)



写真10 大原野神社(2005年11月撮影)

このように、大原野神社では、ここ九十年あまりの間に植生はかなり大きく変化している。なお、写真とは関係のない境内には、モ

『京都府誌』の写真(写真10)では、本殿の背後はヒノキかと思われる針葉樹が多い林となっている。それらの樹木は、全般にさほど太い幹のものはない。今日では、そこには社殿が増築されているため、写真10と近い視点での撮影が難しい。写真11は、二〇〇五年の晩秋に本殿の門の手前から、本殿上方を撮影したものである。今では、本殿裏は樹齢五十年程度かと思われるシイ中心の林となっており、この写真でも本殿裏にはシイが多く見える。ただ、その林中に分け入ってみるとヒノキも少なくない(写真12)。

⑤大原野神社

ミヤシラカシなどの古木が見られるところがある。また、『京都府地誌』には、この神社について「境内老樹鬱然松檜殊ニ多シ」との記述が見られる。

⑥豊国神社

『京都府誌』の写真(写真13)では、唐門の両側にはマツが見える。奥にはマツのほかさまさまな広葉樹も見えるが、全般に樹高は低い。写真14は、二〇〇五年の晩秋に写真13とほぼ同じ視点から撮影したものである。近況では、唐門の両側には、やや大きなクロマツがある。また、その奥にある杜では、クスノキが増えつつあるように見える。一方、そこには枯れマツが一本見られた。

豊国神社の場合、ここ九十年あまりで植生景観は大きく変化している。写真で見える部分については、樹木が大きく成長し、また奥の部分では常緑広葉樹林化が進む兆しが見られる。

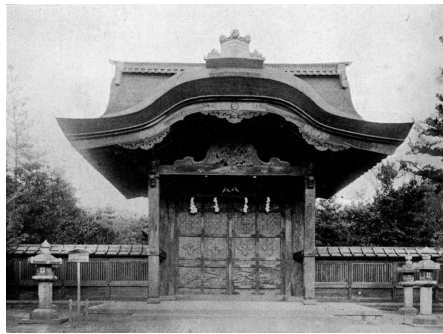


写真13 豊国神社(『京都府誌』より)



写真14 豊国神社(2005年11月撮影)

⑦吉田神社

『京都府誌』の写真(写真15)では、手前に見えるスギかと思われる

針葉樹の高木が目立つ。その背後には、広葉樹が中心と思われる樹林が見える。

写真16は、二〇〇五年の晩秋に写真15と近い視点から撮影したものである。近況でも手前に直立的針葉樹であるスギ、ヒノキが目立つ。ただ、奥に見える広葉樹は大正初期よりも全般に樹高が高くなり、またボリュウムが大きくなっているように見える。手前の樹木に隠れた奥の部分にも、スギやヒノキもあるが、そこにはシイやクスノキなどの常緑広葉樹が多く、一部にムクノキなどの落葉広葉樹もある(写真17)。

このように、ここ九十年あまりの植生の変化は、一見さほど大きくないようにも見えるが、奥の広葉樹林は、大正初期と比べると全般に高木化している。また、古い



写真16 吉田神社(2005年11月撮影)



写真17 吉田神社
(鳥居近くより奥を見る・2005年11月撮影)

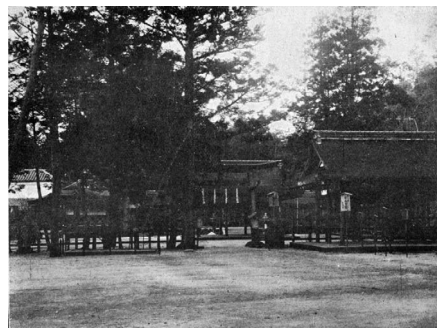


写真15 吉田神社(『京都府誌』より)



写真18 梨木神社 (『京都府誌』より)



写真19 梨木神社 (2005年11月撮影)

写真では樹種構成がよくわからないが、近年では樹林中のシイの割合がずいぶん増えてきているものと思われる⁽¹⁸⁾。なお、明治中期の仮製地形図では、吉田神社の近くには松林(小)と杉林(小)の記号が記されている。

⑧ 梨木神社

『京都府誌』の写真(写真18)では、鳥居の両側にはマツの高木が見える。また、奥には一部にマツや落葉広葉樹も見えるが、常緑広葉樹が多いように見える。なお、『京都府誌』の写真には、すっかり落葉してしまつた樹木が見える場合が多く、冬期に撮影されたものが多いと思われる。

一方、今日の梨木神社は、大正初期には鳥居があつたと思われるところに門ができているなど、鳥居から本殿にかけての状況が大きく変わっている。写真19は、そのかつてはなかつた門から二〇〇五年の晩秋に撮影したものである。本殿付近は、今ではクスノキ中心の林となり、大正初期の写真に写っていたマツや落葉広葉樹はない。ただ、本殿近くには、カツラが一本ある。カツラは境内に別の場所で御神木とされているもの

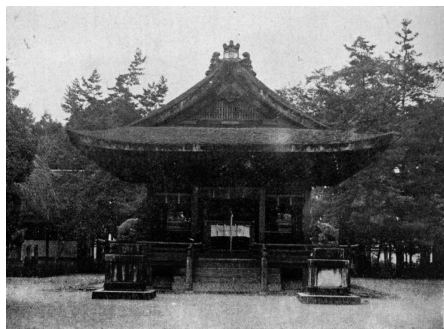


写真20 護王神社 (『京都府誌』より)



写真21 護王神社 (2005年11月撮影)

がある。本殿近くには、神社で見かけることがよくある常緑広葉樹のオガタマノキもある。

梨木神社の社も、ここ九十年あまりの間にだいぶ大きく変化しているようである。樹木は、この間に全般に高木化し、常緑広葉樹が占める割合が増えてきているように思われる。なお、仮製地形図では、この神社の境内には雑樹林(大)の記号が見られる。

⑨ 護王神社

『京都府誌』の写真(写真20)では、写真に見える木々のほとんどは明らかにマツとわかるものである。一方、写真21は、二〇〇五年の晩秋に写真20とほぼ同じ視点から撮影したものである。近況では、拝殿の後方、本殿前方左右にオガタマノキがある。また、本殿裏はクスノキ中心の林となっている。境内にはほかにイチヨウ、スギなども見られるが、かつて多く見られたマツは、ごくわずかにしか見られない。

このように、ここ九十年あまりの間に、護王神社では社の樹種がかなり大きく変化してきている。

⑩ 白峰神宮

『京都府誌』の写真(写真22)では、最も左手にはカイズカイブキかと思われる針葉樹、右手上方にはマツと思われる樹木が見える。また、それらの木々の近くには、何らかの広葉樹も見える。

一方、写真23は、二〇〇五年の晩秋に写真22とほぼ同じ視点から撮影したものである。近況では、鳥居・門の左上方にはやや大きなクスノキが、また右手にはモチノキが見える。また、かつてカイズカイブキやマツと思われる針葉樹があったところは、常緑広葉樹に変わっている。写真では見えないが、境内にはほかにクロマツ、モミ、オガタマノキなどがある。

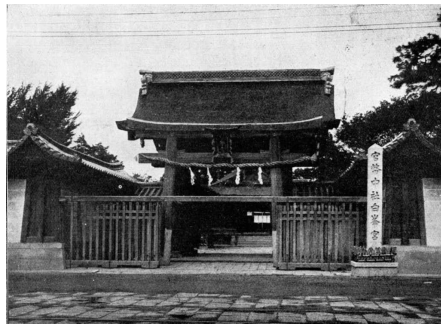


写真22 白峰神社(『京都府誌』より)



写真23 白峰神社(2005年11月撮影)

このように、白峰神宮の鳥居・門の付近については、ここ九十年あまりの間に、植生景観は樹種の変化などによりかなり大きく変化している。ただ、鳥居・門の右手のモチノキだけは今も残り、大正初期よりも少し大きくなつてはいるものの、かつての神社の植生景観の面影を部分的に残している。

⑪ 貴船神社

『京都府誌』の写真(写真24)では、社殿の背後に、スギかと思われる通直で太い幹の樹木が何本か見える。写真の左上に見える落葉広葉樹は、小さなものと思われる。

写真25は、二〇〇五年の晩秋に近年再建された社殿の手前から、その山側と社殿背後の樹木がわかるように撮影したものである。近況では、社殿の後方には一部にスギもあるが落葉広葉樹のモミジが目立つ。また、その社殿の近くにはカゴノキ、カツラなどの広葉樹もある。そのうち、カツラは境内で御神木となっているものがある。



写真24 貴船神社(『京都府誌』より)



写真25 貴船神社(2005年11月撮影)

このように、貴船神社本殿付近の植生景観は、ここ九十年あまりの間に大きく変化している。ただ、かつて本殿近くに多くあったスギは、本殿近くにこそ少なくなつてはいるが、少し離れた道沿いなどには古木をまだ多く見ることが出来る。なお、明治十年代の『京都府地誌』には、貴船神社について「境内老樹鬱葱タリ」と記されている。明治中期の複製地形図の記載などから、その「老樹」にはスギが多かったものと思われる。

⑫伏見稲荷

『京都府誌』の写真(写真26)では、本殿の背後は、一見広葉樹が中心の杜のようにも見える。ただ、写真の上部がかすんでいて見えにくいのが、よく見ると頂上部が円錐形の樹木が少し見えること、また後述のように、かつて幕末の頃などの伏見稲荷には、本殿裏も含めてスギが多くあったことから、そこには大きなスギが何本かあったことも考えられる。

一方、新しい建物ができているために、今は写真26と同じ視点からの撮影は難しい。写真27は二〇〇五年の晩秋に撮影した本殿背後の杜が垣間見られる写真である。また、写真28は本殿裏の杜を近くから撮影したものである。今は、本殿の裏手はクスノキ、コジイ、ナナミノキなどからなる照葉樹林となり、スギなどの針葉樹は見られない。



写真27 伏見稲荷
(本殿斜め前方より・2005年11月撮影)



写真28 伏見稲荷
(本殿横より・2005年11月撮影)

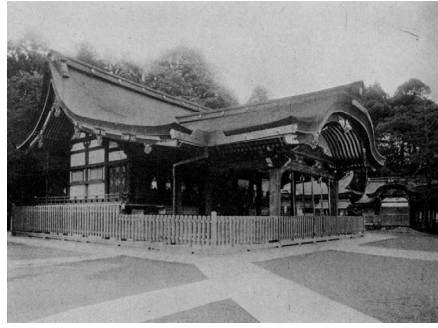


写真26 伏見稲荷(『京都府誌』より)

こうして、伏見稲荷については、ここ九十年あまりの間に、本殿裏の植生がある程度変わっている可能性もある一方、比較的变化が少ない可能性もある。なお、明治中期の仮製地形図では、伏見稲荷の社殿裏手には、一部に雑樹林(大)の記号が見えるところもあるが、全般にマツ林(小)、茶畑、松林(大)の記号が多く見られる。

⑬上賀茂神社

『京都府誌』では、上賀茂神社(正式名は賀茂別雷神社)の楼門付近が写されている(写真29)。その楼門の右手には広葉樹と思われる木が多く見えるが、一本の樹高の高い木は比較的通直で、スギなどの針葉樹かと思われる。また、左上方にも広葉樹の枝が少し見えている。

一方、写真30は、二〇〇五年の晩秋に写真29と近い視点から撮影したものである。近年では、手前左方にタラヨウ、右手にモミジ、サクラなどが撮影するために、少し近くから撮影したものである。その写真で、楼門の右方手前には、比較的小さなスギやサクラが見える。また、その背後の樹林には大きなシイが見える。なお、写真では見えないが、本殿の周辺にはクスノキ、シイ、シラカシなどの常緑広葉樹が多い。

この上賀茂神社の例では、大正期の写真に写っている植生の部分が少ないため、あまり有効な比較はできないが、それでもここ九十年余りの間に、楼門の手前の樹木がかなり増えていることがわかる。また、大正期の写真のスギかと思われる樹木を除けば、楼門右方の樹林の樹木は概して高木化しているように見える。ただ、その樹林の樹種の変化などについては、写真からはわかりにくい。

なお、明治中期の仮製地形図では、上賀茂神社の裏手には檜林(大)の記号が少し見える(図2)。また、上記の写真の樹林付近には、雑樹林(大)の記号が一つ見られる。また、その後ろの山の斜面には崩落記

号も見られる。また、その山には松林（小）の記号が多く見える。一方、『京都府地誌』には、この神社について、「境内老樹数百株アリ近時更に櫻梅数株ヲ植エ……」との記述が見られる。そこに記されている老樹は、仮製地形図からは、スギとヒノキが多かった可能性が高いように思われる。



写真31 上賀茂神社 (2005年11月撮影)

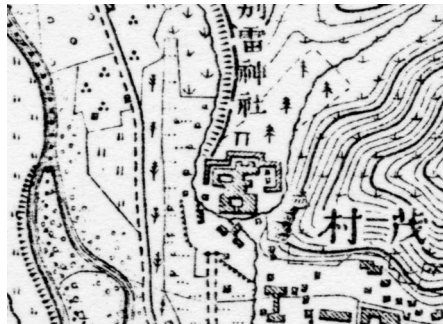


図2 上賀茂神社付近
(仮製地形図を部分拡大したもの)

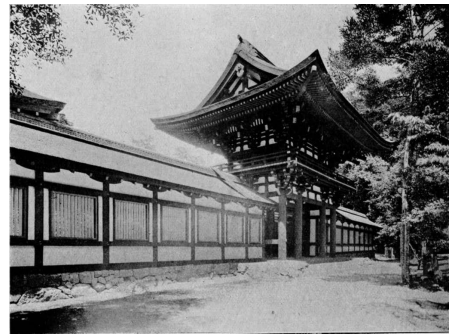


写真29 上賀茂神社 (『京都府誌』より)



写真30 上賀茂神社 (2005年11月撮影)

その社は決して若い樹林ではないにもかかわらず、こうした大きな樹高の変化が起こっているのは、かなり樹高の高いマツやスギなどの針葉樹がなくなり、広葉樹ばかりの林となっているためである可能性がある⁽¹⁹⁾。そのことは、明治初期の下鴨神社の絵図⁽²⁰⁾で、本殿裏付近にスギと見られる描写が少なくないことなどからも考えられるところである。

なお、明治中期の仮製地形図では、本殿裏付近には雑樹林の記号が記され、マツやスギなどの針葉樹の記号は見られない。ただ、それにより、本殿裏付近にスギやマツなどの針葉樹がなかったことにはならない。そ

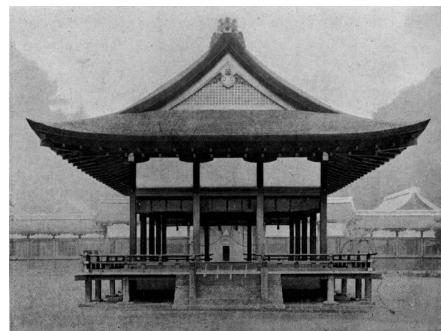


写真32 下鴨神社 (『京都府誌』より)



写真33 下鴨神社 (2005年11月撮影)

⑭下鴨神社
『京都府誌』の写真(写真32)では、下鴨神社(正式名は賀茂御祖神社)の社殿の背後の両側に樹林がぼんやりと見えるだけである。

一方、写真33は、二〇〇五年の晩秋に写真32とほぼ同じ視点から撮影したものである。大正初期の写真との比較から、背後の植生が今はずいぶん低くなっているところが多いと思われる。その樹林は、今はケヤキ、ムクノキなどの落葉広葉樹もあるが、クスノキ、シラカシ、ナナミノキなど常緑広葉樹が多い杜となっている。

れは、たとえば、写真に写っている社殿の南方数十〜百数十メートルの参道付近には、明治中期頃スギが多かったことが当時の写真などからわかるが、仮製地形図ではその付近にスギの記号は全く見られないからである。一方、『京都府地誌』には、下鴨神社について「境内喬木多シ」と記されている。

以上のように、『京都府誌』の神社の写真からわかる大正初期における神社の杜の植生は、北野天神のように、写真に写っている部分だけを見ると、変化が少なく見えるものもあるが、多くの場合、今日の状態とは大きく異なっている。すなわち、今日では神社の杜の植生には、クスノキやシイヤカシなどの常緑広葉樹が主要な樹木となっていることが多いが、大正初期にはスギやマツなどの針葉樹が重要な樹木として多く存在する傾向があった。また、神社付近の樹木は、今日よりも少なく、また小さいことが多い傾向があった。

(2) 『日本写真帖』の神社写真からの考察

明治四五年に出版された『日本写真帖』には、日本各地の名所などを撮影した写真が多く掲載されており、その中には神社の写真も一部含まれている。ここでは、その中から重要な神社や社叢を少し取り上げ、現状と比較しながら考えてみたい。

① 氷川神社（埼玉県さいたま市）

氷川神社は埼玉県さいたま市（旧大宮市）にある元官幣大社で、武蔵国一の宮である。『日本写真帖』には、その写真が大きく取り上げられている（写真34）。その写真の手前には、少し傾いたマツと思われる大きな木々の幹が見える。また右手のマツと思われる樹木の少し奥には、やや分かりにくいですが、やはりマツと思われる高い二本の木が見える。一

方、写真のやや左方にある社殿の左後方には、スギかと思われる大きな木が一本見える。また、写真のやや右手の本殿の背後には、スギの古木かと思われる直立した樹木が数本見える。なお、同写真帳には、その境内の植生について、「境内老杉古松鬱然」と記されており、写真に見える大きな樹木は、実際にマツとスギであるものと思われる。



写真34 氷川神社（『日本写真帖』より）



写真35 氷川神社（2006年3月撮影）

一方、写真35は二〇〇六年三月に、上記の写真の視点に近いところから撮影した近況である。社殿は昭和一五年（一九四〇）に建て替えられているというものの、写真左方の二本の大きな樹木は、一見明治の頃と同じように見える。しかし、それらの二本の樹木は、ともにクスノキで、明治の頃にそのあたりにあった樹木ではない。また、写真のやや右手の本殿の背後は、シラカシなどの常緑広葉樹中心の杜となっている。そこには、かつて目立っていたスギは、比較的小さなものが少しあるだけである。また、マツも付近の杜にはわずかしか存在しない。このように、氷川神社の杜は、ここ約百年の間にたいへん大きく変わっている。

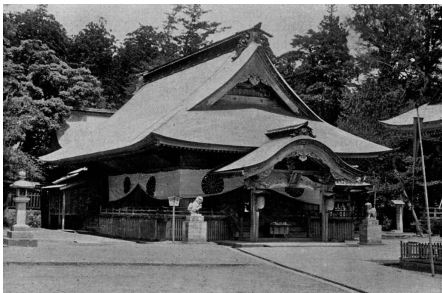


写真36 弥彦神社(『日本写真帖』より)



写真37 弥彦神社(2006年3月撮影)



写真38 妹山(『日本写真帖』より)



写真39 妹山(2006年3月撮影)

② 弥彦神社(新潟県西蒲原郡弥彦村)

新潟県西蒲原郡弥彦村にある弥彦神社は、元国幣中社で越後国一の宮である。その神社も『日本写真帖』に、その写真が大きく取り上げられている(写真36)。その写真の社殿後方には、スギとマツと思われる樹木が多く見られる。また、写真左やや上方には、スギやマツよりも樹高は低いものの、やや大きな常緑と思われる広葉樹も見られる。

一方、写真37は二〇〇六年三月に撮影した弥彦神社の近況である。この神社も社殿が新しくなっているが、社殿背後にある主な木々はスギとマツであり、ここ約百年間の植生景観の変化は比較的小さいように見える。ただ、今日の社殿付近に見られるマツは、その木の大きさなどから、古い写真に写っているものではなく、新しく成長してきているものが多いと思われる。

なお、『日本写真帖』には、この神社について「四境の老幹古樹鬱然として繁茂し風景頗る閑雅なり」と記されている。今日見られる大木にはスギが多いが、スギの林の中などには、ケヤキなどの大木も点々と見られる。一方、『日本写真帖』には、この神社の背後にある神体山である弥彦

山について、「弥彦山の半腹以上は兀山にして樹木稀疎」と記されている。近況写真でも少しわかるように、弥彦山は今では上部まで落葉広葉樹などの高木の森林となっている。

③ 妹山(大名持神社社叢・奈良県吉野郡吉野町)

奈良県吉野郡吉野町にある妹山(いもやま)は、大名持神社の社叢で、斧鉞を絶つ神聖な山とされ、天然記念物となっている。『日本写真帖』には、その山は小さいながらも写真38のように取り上げられている。写真左手の樹木がほとんどない山とは異なり、妹山は全体を樹木が覆っている。ただ、その樹種は、写真からはわかりにくい。中腹から下部にかけては広葉樹が多いものと思われる。また、山の上部はヒノキが多いものと思われる。

一方、写真39は明治の写真の視点に近いところから、二〇〇六年三月に撮影した近況である。一見、明治の頃と変わらないようにも見えるが、左手の稜線の形状や樹冠の大きさなどから、山の中腹については、近年の方が大きな樹木が多くなってきているのではないかと思われる。

なお、妹山は立ち入りが禁止されているため、杜の樹種などを詳しく見ることができなかったが、山の麓に見える樹木などから、山の中腹から下部にかけての樹木はシイやカシ類が多いと思われる。一方、山の上部にはヒノキが多く見られるが、ヒノキは陰樹性がさほど高くなく、遷移の過程では、より陰樹性の高いアスナロなどの針葉樹やシイなどの広葉樹に負けてゆく樹種であるため、斧鉞が絶たれたのは案外さほど古い時代ではないのかもしれない。その山の上部のヒノキは、かつて植えられたものや、それが母樹となって広がったものである可能性があるように思われる。

② 絵図類からの考察

(1) 方法

絵図には実際にはないものが描かれることもある一方、実在するものが描かれないこともある。そうした絵図がもつ性格のため、ある絵図を植生景観に関して重要な資料とするためには、その絵図の写実性をなんらかの方法によって示す必要がある。その一つの方法として、同時代に同一の場所を独自に描いた複数の資料性が高い可能性があると見られる絵図類の比較検討がある。

ここでは、幕末の『再撰花洛名勝図会』と室町後期に描かれたいくつかの洛中洛外図について、主にそうした方法により、かつての鎮守の杜の姿を明らかにしてゆきたい。

なお、ある絵図の植生景観に関する資料性を考えるにあたり、絵図に描かれた樹木などの植物は、ふつうその種までも特定することは難しいため、マツタイプ、スギタイプ、サクラタイプ、ウメタイプなどのように「タイプ」に分けて考察をすすめることになるが、ここでは表現簡略

化のため、マツ、スギ、サクラ、ウメなどと「タイプ」を省略して記すことにする。

(2) 『再撰花洛名勝図会』からの考察

『再撰花洛名勝図会』（元治元年（一八六四））は、京都の東山方面の名所を中心に描いた名所図会である。それは平塚瓢斎の草稿をもとに木村明啓と川喜多真彦が分担して執筆したもので、挿図は松川半山、横山華溪、井上左水、梅川東居らによるものである。挿図が綿密に描かれていることは一見すればわかるが、本図会中、東山名所図会序には『……安永のむかし、秋里某があらはした都名所図会の、絵のよりの、事そぎすぐして、しちに似ぬが、おほかるをうれへ、音羽山の、おとに聞こえたるすみぎの上手に、かき改めさせ……』と、また、例言には『……其本原たる都名所の沿革異同あるのみならず、図作の粗漏之を他邦に比すれば恥づる事多し。余是を慨歎するの余り……』とあるように、挿図の写実性を高めることが意図的にねらわれていることがわかる。一方、同じ例言の中には『絵図は其地に画者を招きて真を写すといへども、斜直横肆位置を立つるの遠近に随ふて違ふ所無きことを得ず……』とあるように、多少の不正確さのあることも断っている。

ただ、実際にどの程度写実的に描かれているかは、すぐにはわからないが、『再撰花洛名勝図会』には、東山方面の同一場所が複数描かれている挿図がいくつももあるため、それらの比較考察により挿図の写実性が明らかになるものがある。ここでは、熊野権現社、滝尾社、日吉社、伏見稲荷について、挿図の比較考察から幕末におけるそれら神社の植生を明らかにする。

① 熊野権現社

熊野権現社は、今日の左京区聖護院にある神社である。図3は井上左水筆の熊野権現社付近の図であり、図4は梅川東居筆の図の一部で、ここにも熊野権現社の杜（聖護院の森）が描かれている。図5は、その杜の部分を拡大したものである。また、図6は、横山華溪により見開き六



図5 熊野権現社付近(図4の部分
拡大図・『再撰花洛名勝図会』より)



図6 熊野権現社付近
(横山華溪画・『再撰花洛名勝図会』より)



図3 熊野権現社(井上左水画・『再撰花洛名勝図会』より)



図4 聖護院付近
(梅川東居画・『再撰花洛名勝図会』より)

ページにわたって描かれた東山全図の中の熊野権現社付近を拡大したものである。三人の画家により独自に描かれたと考えられるこの三種の図は、熊野権現社付近が決して同じような詳しきで描かれているわけではないが、その付近の大きな植生景観はよく一致している。すなわち、どの図においても、聖護院の森は主にマツの高木からなる杜として描かれているが、鳥居のすぐ近くには一本の比較的大きな広葉樹も描かれている。また、そこにはマツの木のように高くはないが、マツとは異なる樹種も少なくないように見える。また、鳥居の手前部分には、ウメの林が共通に描かれている。

このことから、これら3種類の図は、熊野権現社付近の江戸末期の植生景観を写実的に描いていると考えることができる。そして、当時の熊野権現社の主な樹木はマツであったこと、一方、数は少ないものの、広葉樹の比較的大きな木もあったことがわかる。

② 伏見稲荷

図7は松川半山の描いた稲荷社（伏見稲荷）付近の図であり、図8もやはり松川半山が稲荷山のあたりを描いた図であり、そこには稲荷社付近も描かれている。

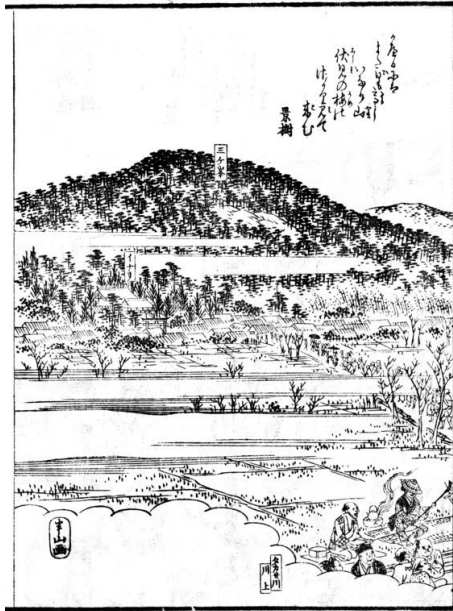


図8 伏見稲荷
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)



図7 伏見稲荷 (松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

③滝尾社
滝尾社は、今日の東山区の南部にある神社である。松川半山による近景の図(図10)では、本社の左手にマツの太木が二本描かれ、その周囲には何本もの広葉樹が描かれている。本社のおすぐる右手には、マツが五本、街道に面した鳥居の両側には三本のマツが描かれている。画馬堂の右手には、やや大きなウメかと思われる木も見える。

一方、横山華溪による東山全図(図11は部分拡大したもの)では、本社の左手にマツの太木が二本描かれ、その下に広葉樹が描かれている。な

多く紹介されている。

なお、『再撰花洛名勝図会』には、稲荷社のスギにまつわる話や歌が多く紹介されている。

が連なる参道付近にはスギが多く描かれている。一方、本殿手前の境内には樹木は多く描かれていないが、描かれている樹木としてはマツが目立つ。

図9は、松川半山の描いた別の稲荷山のあたりを描いた図の稲荷社付近を拡大したものである。これは、図7よりもずっと遠方から稲荷社あたりを描いたものであるが、稲荷社付近にはスギが目立つ。また、その背後の山はマツが中心の植生として描かれている。

両図の比較から、幕末の頃、稲荷社では、本殿のおすぐる背後などではスギが主要な樹木として多くあったものと考えられる。一方、背後の山や境内にはマツが目立つところも多かったものと思われる。

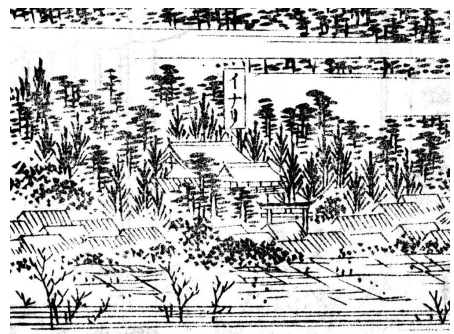


図9 伏見稲荷
(図8の部分拡大図・『再撰花洛名勝図会』より)



図10 滝尾社
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)



図11 滝尾社付近
(横山華溪画・『再撰花洛名勝図会』より)

お、そのマツの一本は、くの字型をした樹形で、近景の図のそれとよく似ている。他に描かれているものは、本社右手のマツの木と、その背後の竹林のみである。

図11は、広い範囲を描いた部分図であり、省略も多い図であるとはいえ、両図の比較から、幕末の頃の滝尾社には、マツの大本が二本あり、社の周囲には、ある程度の広葉樹もあつたといえマツが主体の植生であつたものと考えられる。

④日吉社

図12は、三十三間堂の東方にある日吉社付近を描いた松川半山の図である。その参道付近には、一部にスギや広葉樹も見られるが、マツが比較的多く見られる。また、図上部の拝殿付近には、サクラが四本描かれている。また、拝殿の左方の通直な大きな樹木は、モミを描いている可能性がある。図上端に近い本殿付近には、マツが多いが、その少し左方には大きな広葉樹が見える。一方、図13は、旧大仏殿付近を描いた松川半山による別の絵の一部である。その日吉社のあたりにはマツが多く、



図12 日吉社
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

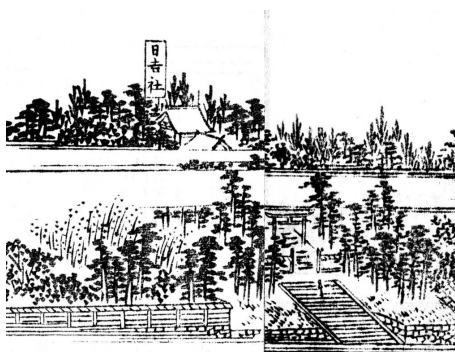


図13 日吉社
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

社(八坂神社)については、相互比較可能な複数の図があるが、それについては別途検討済みであるため、ここでは割愛した。

比較検討できる図で見ると、『再撰花洛名勝図会』の植生描写は、かなり写実性が高いものが多いことから、ほかの神社の杜も比較的写実的に描かれている可能性があると考えられる。そのことは、『再撰花洛

また一部にスギも描かれている。

両図は、日吉社付近にマツが多く、また一部にスギがあるという点では大まかに共通していると思われることもできるが、本殿近くの大きな広葉樹や拝殿付近のモミやサクラなどについては、比較できず、その写実性を確認することはできない。

以上のように、『再撰花洛名勝図会』では、比較できる挿図があるものについては、神社周辺の植生は一部の例外をのぞき、おおむね写実的に描かれていると考えられる。また、その結果、それらの神社では、当時はマツやスギが主要な樹木となっていたところが多かったと考えられる。なお、祇園

名勝図会』の挿図は、絵図類では写實的に描かれていないことも少なくない山地部の植生描写までも、かなり写實的に描かれているものが多⁽²⁴⁾いことから考えられる。

そこで、以下に挿図の比較考察はできないものの、神社付近の植生の描写例を示したい。なお、『再撰花洛名勝図会』には、それぞれの名所の説明も多く記されている。そこには、神社境内の樹木についても少し記されていることもあり、そうした記述は大いに参考になる。

・粟田天王社

図14は、現在の東山区粟田口にある粟田天王社を松川半山が描いたものである。本殿の背後などは高木のマツ林として描かれている。一方、参道沿いに、やや大きなスギが二本描かれている。また、「観をん（観音）」、「ふとう（不動）」と記されている建物の近くには、大きな樹木は少ないが、広葉樹が多く描かれている部分もある。

・吉水弁天社

図15は、現在の円山公園の東端付近にあった吉水弁天という神社を松



図14 粟田天王社
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

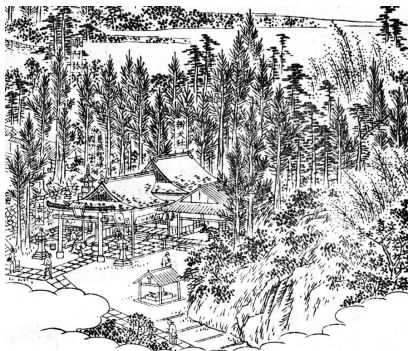


図15 吉水弁天社
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

川半山が描いたものである。その社の背後のあたりには多くのスギが描かれている。また、そこには一部マツや広葉樹も見られる。手前の山の斜面に描かれている広葉樹は、小さなものが多い。

・吉田神社

図16は、松川半山によるもので、吉田神社を描いたものである。図の中央よりも少し左手には、スギの巨木が一本描かれている。図の左方、本殿の背後にはマツとともに高木の広葉樹が描かれている。図の中央付近には大小の広葉樹が描かれているが、図の右下方の小さな祠のあたりは、スギとマツが多い描写となっている。

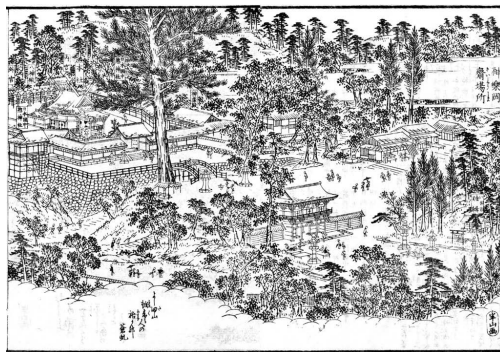


図16 吉田神社
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

・春日社、若宮、神海具社ほか

図17は吉田神社の近くの社寺を描いた図で、これも同じく松川半山によるものである。図の左上方の春日社（図18は拡大図）のあたりでは、社殿の背後は主にスギの林となり、また広葉樹やマツも少し描かれている。社殿の手前にはマツとともに広葉樹も描かれている。そのうち、一本の広葉樹は、かなり大きな木である。

また、図の上部中央付近には若宮と記された社が見える（図19は拡大図）。その近くには大きなスギが一本描かれている。そのスギの近くにはマツが、また参道や社殿の左方には広葉樹が多く描かれている。また、若宮の右手には兼俱具社と記された社も見える。その周辺には、さほど

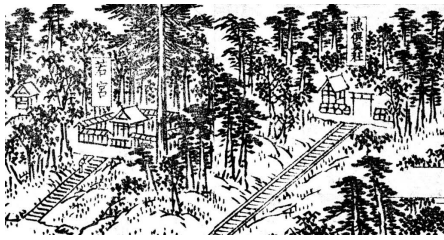


図19 若宮・兼俱具社付近
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

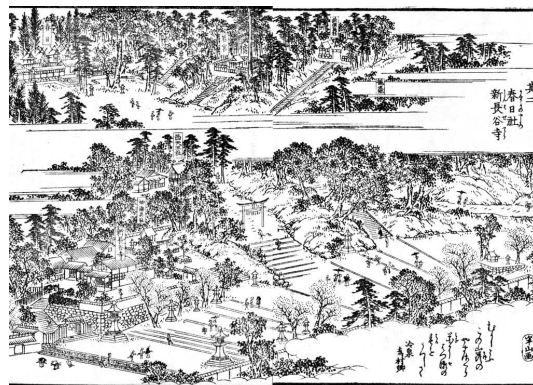


図17 春日社・若宮など
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)



図20 西天王社付近
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

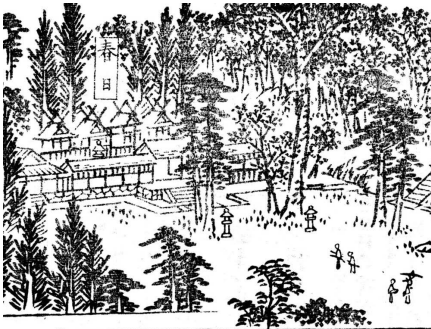


図18 春日社付近
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

大きくないマツと広葉樹の林が描かれている。
一方、図の中央やや左手の西天王社の周辺(図20は拡大図)もマツと広葉樹の林が描かれている。その左下方の神海具社の背後は、珍しくマツやスギのない広葉樹の杜として描かれている。

殿の手前には大きなスギが一本描かれ、「杵大木」と記されている。その社殿のすぐ背後には広葉樹が多く描かれているが、その近くにはそれらの木々よりも高いマツが何本か描かれている。
その他の境内付近の主な樹木としては、やや大きなスギが三本、サクラとマツ

・飯成社

図21は、聖護院の森の南東にあった飯成社の図である。その井上左水筆の図には木は多く描かれていないが、神木と記された大きなマツが一本と比較的大きいスギが一本描かれている。そのスギの近くには、樹高がスギの半分程度の広葉樹が一本見える。また、図の左下方の鳥居付近には、さほど大きくはないマツやウメ、また比較的小さなスギなどが描かれている。



図22 若王子神社付近
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)



図21 飯成社
(井上左水画・『再撰花洛名勝図会』より)

・若王子神社
図22は、後白河上皇が紀伊熊野権現を勧請したという若王子神社付近を松川半山が描いたものである。図の左方に見える四棟の社

がそれぞれ数本描かれている。そのうち、サクラについては、『再撰花洛名勝図会』に、近年「梅桜楓等数株寄栽し…」との記述も見られる。

・日山神明社

図23は、東岩倉山麓の日山神明社を描いた図である。画者は松川半山である。本殿のすぐ隣にはいくつかの又に分かれた大きなスギの神木があり、「八杉殿」と記されている。また本殿周辺はやや大きなスギの林となっている。なお、神木のスギについては、『再撰花洛名勝図会』にも、「大木の老杉なり」と記されている。



図23 日山神明社
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

本殿の手前にある外宮や拝殿の近くでは、図の左手ではマツの多い林、右手では広葉樹の多い林となっている。ただ、鳥居の右手には、上部は雲に隠れた形になっているが、スギの大木が一本描かれている。また外宮の背後にも、比較的大きなスギが一本描かれている。

・三嶋明神

松川半山筆の三嶋明神の図(図24)では、境内の樹木はマツが主体である。また、サクラと思われる樹木が数本描かれ

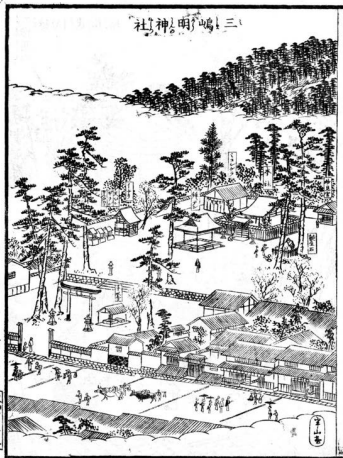


図24 三嶋明神
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

ている。本殿の背後には、マツとともに樹高のさほど高くない広葉樹が多い木立が見える。そこには、やや樹高の高いスギも一本描かれている。

・地主権現社

清水寺に隣接した地主権現社は、松川半山により図25のように描かれている。その図では、本殿のすぐ横から背後のあたりにはスギと広葉樹が多く、またその先はマツ林となっている。一方、本殿の手前にはサクラかと思われる木が数本描かれ、その近くにはマツや広葉樹も見られる。



図25 地主権現社
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

・新熊野神社

新熊野神社は、松川半山により図26のように描かれている。図では右手に大きな御神木の広葉樹が一本描かれている。それは、「再撰花洛名勝図会」の記載からクスノキであることがわかる。ただ、境内付近の樹木としてはスギが圧倒的に多い。それらは、神木のクスノキほどではないが結構大きい木も多いように見える。また、神木のクスノキの近くにはマツも一本ある。他にも広

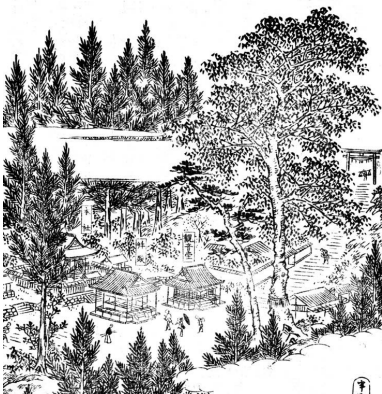


図26 新熊野神社
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

葉樹が少し見えるが、いずれも低木である。

・剣宮

新熊野神社東南の剣宮は、松川半山により図27のように描かれている。その神社付近には、マツやスギも一部描かれてはいるが、広葉樹がその周辺に多く見られる。その広葉樹が常緑樹か落葉樹かはわからないが、樹高が付近のマツやスギと変わらないか、むしろそれよりも高いものが少なくない点は、『再撰花洛名勝図会』で描かれている神社の杜の中では例外的なものである。



図27 剣宮
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

・南禅寺裏の祠
図28は、南禅寺の裏の山道で柴を運ぶ人々などを描いたものであるが、その人々の背後には鳥居と小さな祠も描かれている。その祠の付近には、スギやマツは全く見えず、何らかの広葉樹ばかりが描かれている。その広葉樹が常緑樹か落葉樹かはわからないが、祠付近の植生の様子が詳しく見えな



図28 南禅寺裏の祠
(松川半山画・『再撰花洛名勝図会』より)

花洛名勝図会』中、祠の近辺にマツやスギが一本も描かれていない珍しい例である。

以上のように、『再撰花洛名勝図会』で挿図の比較検討が難しい神社でも、剣宮や南禅寺裏の祠などのように一部例外はあるものの、大部分の神社でマツとスギが神社の主要な樹木であったと考えられる。ただ、そうした神社でも、新熊野神社のように、数は少ないもののクスノキなどの広葉樹が大木として存在していた場合もあった。

(3) 初期洛中洛外図からの考察

次に、一六世紀初期から中期にかけて制作されたと考えられるいくつかの洛中洛外図をもとに、当時の神社の植生を考えてみたい。

ここで取り上げる初期の洛中洛外図は、国立歴史民俗博物館蔵の歴博甲本洛中洛外図（以下簡略に歴博甲本とする）、山形県米沢市蔵の洛中洛外図（上杉家旧蔵、以下簡略に上杉本とする）、模本ながら歴博甲本と上杉本の間で景観を描いており史的価値の高い東京国立博物館蔵の洛中洛外図（以下簡略に東博模本とする）、上杉本に近い時代の景観を描いたものと考えられる国立歴史民俗博物館蔵の歴博乙本洛中洛外図（以下簡略に歴博乙本とする）の四点である。これらの洛中洛外図は、当時の町並みや風俗などを細かに描いており、植生景観についても写実的に描いている可能性があると思われるものである。

なお、現存する洛中洛外図の中で最古と考えられる歴博甲本の制作年代は、大永五年（一五二五）に造営された將軍義晴の柳御所とみられる公方邸が描かれていることから、一五二〇年代後半から一五三〇年代中期と推測されている²⁵⁾。また、ここで取り上げるものの中では、歴博乙本とともに遅い時代の作品である上杉本洛中洛外図は、天正二年（一五七四）に織田信長が上杉謙信に贈ったとされるもので、制作年代

には諸説があるものの、景観年代は天文年間（一五三二～五四）後半と考えられている。⁽²⁶⁾一方、東博模本の景観年代は、歴博甲本に次いで古く天文八年（一五三九）以降、また、歴博乙本の景観年代は上杉本に近い天文年間か、もう少し古いと考えられている。⁽²⁷⁾このように、これら四点の洛中洛外図は、十数年から二十数年ほどの期間の景観を描いたものである可能性が高い。

過去の植生景観を明らかにするために絵図の比較考察を行う場合、できる限り近い時代の絵図を使うのが望ましい。それは、樹木の成長や伐採等により、植生景観は短期間に大きく変化することがあるためである。しかし、五百年近く前の時代の絵図で、きわめて近い時代に同一場所を描いた複数の絵図類が存在することは珍しく、また仮に存在しているとしても、それを探しだすことは容易ではない。一方、筆者がかつて行った歴博甲本と上杉本における山地描写の比較考察は、その時代における京都周辺の山の植生景観を考える上で有効であったと考えられる。⁽²⁸⁾そのようなことから、ここでは初期の鎮守の社の状態を比較検討することにより、その時代における鎮守の社の状態を考えることにしたい。もちろん、その際には、十数年から二十数年ほどの期間における樹木の成長や伐採などによる消失等の景観変化がありうることも考慮しなければならない。

なお、ここでは寺院内などにある鎮守社、神社の御旅所、小さな祠は対象外とした。また、洛中洛外図は、きわめて広範囲を描いたものであるため、それぞれの神社の植生は十分詳しくは描かれていないはずである。そのため、そこに描かれている樹木などの植物は、シンボリックに描かれている場合が多いと考えられる。そのため、図が写実的なものであっても、描かれた樹木などの植物種は、特別な御神木などを除けば、実際は描かれているよりもずっと多く存在していたものと考えられる。

①上賀茂神社

上賀茂神社は、歴博甲本には図29のように描かれている。右手上方の朱塗りの社殿の背後には、スギが多く描かれている。また、この付近は冬の様子が描かれているため、スギとともにあるのは、常緑広葉樹と思われる。その他の部分でもスギがしばしば見られる。また、図の右手中央から下方にはマツが多く見られる。また、落葉広葉樹もある程度見られるが、常緑広葉樹はわずかし描かれていない。なお、鳥居上方の小さな丘の上の樹木は、上部が金雲に隠れているものが多いが、下部の通直な幹の描写などから、そのほとんどはスギと思われる。

一方、東博模本でもスギがやや多く描かれている（図30）。他にマツ、常緑広葉樹、落葉広葉樹もある程度描かれている。そのうち、落葉広葉樹はやや少ない。本殿付近では、スギ、常緑広葉樹、落葉広葉樹が描



図30 上賀茂神社
(東博模本洛中洛外図より)



図31 上賀茂神社
(上杉本洛中洛外図より)



図29 上賀茂神社
(歴博甲本洛中洛外図より)

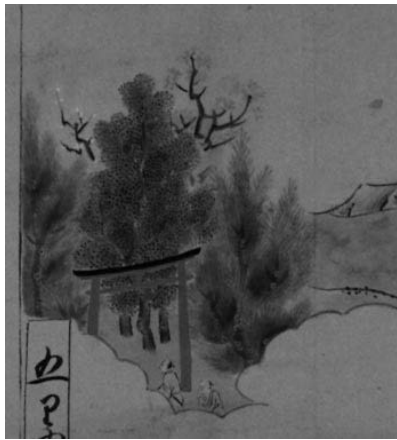


図32 下鴨神社
(東博模本洛中洛外図より)

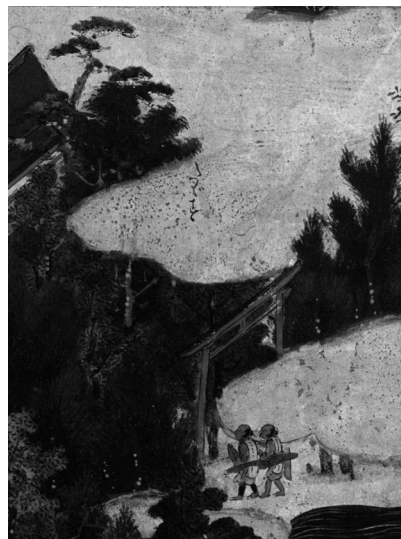


図33 下鴨神社
(上杉本洛中洛外図より)



図34 今宮神社
(歴博甲本洛中洛外図より)



図36 今宮神社
(上杉本洛中洛外図より)

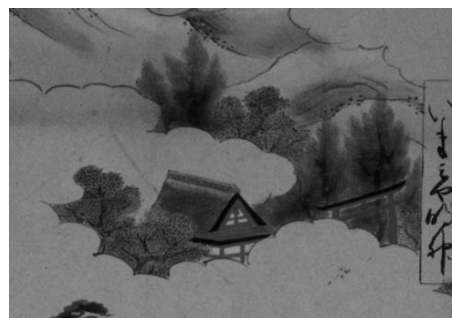


図35 今宮神社
(上杉本洛中洛外図より)

かれ、そのうち常緑広葉樹の割合がやや大きい。
また、上杉本では、本殿付近は主にスギの林として描かれており、一部に広葉樹も見られる(図31)。また、図の下方ではマツが多く描かれており、一部に広葉樹の描写も見られる。なお、上杉本では、この付近に描かれている広葉樹が、常緑か落葉かはわかりにくい。
以上三点の洛中洛外図の比較から、当時、上賀茂神社では、スギが重要な樹木となっていたものと考えられる。また、本殿の近く以外ではマツも比較的多く見られたものと思われる。また、常緑広葉樹、落葉広葉樹もある程度あったものと考えられる。

②下鴨神社

下鴨神社は、東博模本には、その鳥居の両側にスギが、また鳥居の上方に広葉樹が描かれている。その広葉樹は、常緑広葉樹と落葉広葉樹を描き分けているように見える(図32)。

一方、上杉本では、同じく鳥居付近を中心に描かれており、鳥居の両側はスギが多く、鳥居と奥の社殿の間は広葉樹が多い描写となっている(図33)。なお、鳥居左手のスギの描写は、詳しく見ないとややわかりに

くい。また、図の左上には高いマツが一本見える。
両図を比較すると、鳥居の両側にスギが多く、その奥には広葉樹が多いという点では一致する。

③今宮神社

今宮神社は、歴博甲本では、図34のように、スギと常緑広葉樹が多く

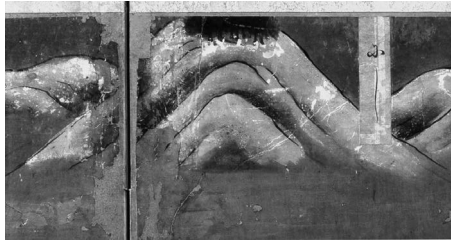


図37 愛宕神社
(歴博甲本洛中洛外図より)

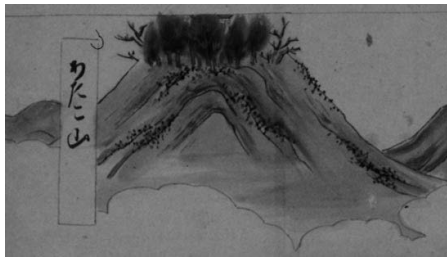


図38 愛宕神社
(東博模本洛中洛外図より)



図39 愛宕神社
(上杉本洛中洛外図より)

一方、上杉本では、その神社の付近にはマツが多く描かれているが、本殿の裏手にはマツとともに一本の大きな広葉樹が見える(図41)。両図の比較から、当時の平野神社には、マツとともになんらかの広葉樹も少なからずあったものと考えられる。た



図41 平野神社
(上杉本洛中洛外図より)

④愛宕神社
愛宕山の上にある愛宕神社付近は、歴博甲本では図37のように描かれている。図の上部が切れた形となっているが、そこにはスギの林が描かれていると思われる。また、東博模本でも、愛宕神社付近には多くのスギが描かれている(図38)。また、スギ林の両側には落葉広葉樹も少し見える。また、上杉本でも、その神社付近はスギのみの林として描かれている(図39)。

以上三点の図の比較から、当時、愛宕神社付近には高木のスギの樹林

描かれている。また、図の上部には、少し落葉広葉樹も見える。また、東博模本でも、今宮神社付近にはスギと常緑広葉樹が同じくらい描かれている(図35)。一方、上杉本では、神社周辺は、ほとんどスギばかりの林として描かれており、一部に落葉広葉樹も見られる(図36)。これら、三点の図の比較から、当時、今宮神社ではスギが多く見られたものと考えられる。また、上杉本の描写は異なるものの、常緑広葉樹を中心とした広葉樹も少なからずあった可能性が高いように思われる。

⑤平野神社

平野神社は、歴博甲本ではマツと落葉広葉樹が、一見ほぼ同程度に多く描かれているように見える(図40)。ただ、よく見ると、社殿左手の雪を多くかぶった一本の常緑樹は、マツではなく常緑広葉樹であるものと思われる。また、社殿右手の二本の常緑樹も、樹形はマツに近いが、葉の付き方などから、何らかの常緑広葉樹を描いた可能性もある。

平野神社は、歴博甲本ではマツと落葉広葉樹が、一見ほぼ同程度に多く描かれているように見える(図40)。ただ、よく見ると、社殿左手の雪を多くかぶった一本の常緑樹は、マツではなく常緑広葉樹であるものと思われる。また、社殿右手の二本の常緑樹も、樹形はマツに近いが、葉の付き方などから、何らかの常緑広葉樹を描いた可能性もある。



図40 平野神社
(歴博甲本洛中洛外図より)



図42 北野天神 (歴博甲本洛中洛外図より)



図43 北野天神 (東博模本洛中洛外図より)



図44 北野天神 (歴博乙本洛中洛外図より)



図45 北野天神 (上杉本洛中洛外図より)

⑥ 北野天神

北野天神は、歴博甲本では、鳥居の付近など、図の左手ではマツが多く描かれている。その付近では、一部に落葉広葉樹も見られる(図42)。また、右手下方の鳥居付近にもマツが多く描かれている。一方、本殿の右手から上方にかけては、スギが多く描かれている。なお、本殿上方か

だ、マツと広葉樹の割合を述べることは、二点の図の比較からは難しい。

ら右手上方のスギはその上部が金雲で隠れている。また、本殿の周辺には何本かのウメと見られる落葉広葉樹が描かれている。

東博模本でも、図の左手の鳥居付近にはマツが多く、一部に落葉広葉樹も見られる(図43)。また、本殿下方の門の手前付近にもマツが多く描かれているが、そこには少しスギや常緑広葉樹と思われる広葉樹の描写も見られる。また、本殿の周辺、塀で囲まれた内側の部分でも、マツが目立つ形で多く描かれている。そこには、ウメなどの落葉広葉樹もあ

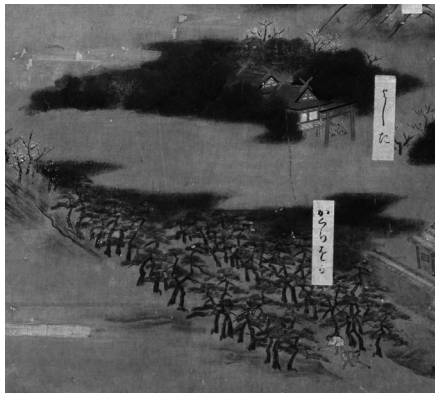


図46 吉田神社
(歴博甲本洛中洛外図より)



図47 吉田神社
(歴博乙本洛中洛外図より)



図48 吉田神社
(上杉本洛中洛外図より)

る程度描かれ、また左手の門の上方には、スギが二本、やや目立つ形で描かれている。

また、歴博乙本でも、図の左手の鳥居付近にはマツが多く、一部に落葉広葉樹が描かれている(図44)。また、鳥居のやや左下方には、竹林も少し見える。また、本殿の周辺にも、マツが多く描かれているが、そこにはウメかと思われる落葉広葉樹もやや多く描かれている。また、その左手の門の上方には、一本あるいは二本のスギがやや目立つ形で描かれている。

一方、上杉本では北野天神付近は多くの金雲で見えにくいものの、やはり図の左手の鳥居付近にはマツが多く描かれている(図45)。また、本殿の周辺にも、マツが比較的多く描かれているが、本殿近くにはウメと思われる落葉広葉樹が数本描かれている。また、本殿左方、門の上方にはスギが四本ほど描かれている。また、その右手上方にもスギが何本が見られる。

これら四点の図の比較から、当時、北野天神には全体的にマツが多く、また本殿近くにはウメが多く見られ、一部にはスギもあつたものと考えられる。

⑦ 吉田神社

歴博甲本では、吉田神社本殿のあたりは、三方を常緑広葉樹林で囲まれているような描写となっている(図46)。また、その樹林の上には、何本か落葉広葉樹がのぞいている。一方、その参道沿いは、きれいなマツ並木となっている。一方、歴博乙本では、本殿付近にはマツとスギが多く見られる(図47)。また、樹高がさほど高くない常緑と思われる広葉樹もややまとまって描かれている。また、参道の鳥居付近はマツが多く描かれている。また、上杉本では、本殿周辺にはスギが多く見られ、またマツや広葉樹もそれぞれある程度描かれている(図48)。

これら三点の図を比較すると、吉田神社本殿付近については、歴博甲本のみが他と大きく異なる描写となっている。その植生の違いは、十数年から二十数年の時間差を考慮しても、やや考えにくい変化であり、歴博甲本か他の二点の図における植生描写の写実性が疑われるところである。ただ、他の二点の図では、吉田神社付近の植生は、大きな矛盾もなく描かれている。また、参道付近の植生描写は、歴博甲本と同乙本ではよく一致している。

⑧ 祇園社(八坂神社)

歴博甲本では、祇園社(八坂神社)の周囲にはマツが多く描かれている(図49)。また、本殿の下方にはスギ、右手にはウメの可能性もあると思われる落葉広葉樹、また、図の右手下方には常緑と思われる広葉樹も描かれている。

東博模本でも、全体的にマツが多く描かれているが、その図では



図51 祇園社
(歴博乙本洛中洛外図より)



図49 祇園社 (歴博甲本洛中洛外図より)



図52 祇園社
(上杉本洛中洛外図より)



図50 祇園社
(東博模本洛中洛外図より)

本殿の右上方から上方にかけてスギもやや多く描かれている(図50)。また、数は多くないが、広葉樹も所々に描かれている。また、本殿の右下方にはシユロが一本見える。また、歴博乙本でも、その境内にはマツが多く描かれており、一部に落葉広葉樹

と思われる広葉樹が見える(図51)。

上杉本でも、全体的にはマツが多く描かれているが、本殿の右手のあたりにスギが数本描かれている(図52)。また、本殿近くにシユロが一本見える。また、本殿の背後などには広葉樹も少し描かれているように見える。

これら四点の図の比較から、当時の祇園社にはマツが多く、またスギや広葉樹もある程度あったものと考えられる。また、本殿近くには一本のシユロがあつたものと思われる。

⑨ 松尾神社

松尾神社は、歴博甲本では図53のように描かれている。そこに見える植生は、鳥居付近のマツのみである。また、東博模本でも鳥居付近のマツは、歴博甲本と同様に描かれている(図54)。また、その右上方にはスギと常緑かと思われる広葉樹が見える。一方、歴博乙本では神社の本殿付近が描かれ、その付近にはマツがやや多く見られる(図55)。また、常緑と思われる広葉樹と落葉性と思われる広葉樹も、それぞれある程度描かれている。また、上杉本では、松尾神社は金雲に隠れながらも鳥居付近から本殿付近まで描かれ、その周辺にはマツ、スギ、常緑広葉樹、紅葉をした落葉広葉樹が描かれている(図56)。それらの樹木のうち、図の中程から下方にかけては、マツがやや多く見られる。

四点の図の比較から、当時、神社の鳥居付近にはマツがたいへん多かったものと考えられる。本殿付近については、歴博乙本と上杉本との比較から、マツもあつたが、常緑広葉樹も少なからずあり、また落葉広葉樹もあつた可能性が高いと思われる。ただ、歴博乙本と上杉本とは、その付近のマツの割合はだいぶ異なる。また、東博模本と上杉本の描写から、一部にスギも見られたものと考えられる。

歴博甲本では、七野社付近には落葉広葉樹が多く描かれ、また常緑広葉樹の描写も少なくない(図57)。なお、社殿下方に描かれている少し雪をかぶった一本の常緑樹は、樹形などが少しマツに似た描写となっている。

一方、上杉本には落葉広葉樹も描かれているが、常緑広葉樹の方が多

⑩七野社



図55 松尾神社
(歴博乙本洛中洛外図より)



図53 松尾神社
(歴博甲本洛中洛外図より)



図56 松尾神社
(上杉本洛中洛外図より)



図54 松尾神社
(東博模本洛中洛外図より)

い描写となっている(図58)。その図には、本殿の後ろに一本のマツも描かれている。

両図の比較から、当時、七野社には広葉樹が多かった可能性が高いと考えられる。ただ、広葉樹が常緑性のものが多かったのか、落葉性のものが多かったのかについては、歴博甲本と上杉本とは描写が異なり、定かではない。マツは上杉本の描写などから、少しあった可能性はあるが、あったとしても多くはなかったものと思われる。

⑪三条の八幡

歴博甲本では、三条の八幡付近には、大小三本のマツと二本の常緑と思われる広葉樹が描かれている(図59)。また、歴博乙本では、鳥居の下方にマツが二本、鳥居から本殿あたりにかけて、やや大きい常緑広葉樹が数本とサクラと見られる落葉広葉樹が三本、また本殿の背後に樹高の高い落葉広葉樹が二本と、それよりも少し樹高の低い常緑広葉樹が二本ほど描かれている(図60)。一方、上杉本では、三条の八幡付近にはほとんどが常緑かと思われる広葉樹しか描かれていない(図61)。



図57 七野社
(歴博甲本洛中洛外図より)



図58 七野社
(上杉本洛中洛外図より)

以上のように、四点の初期洛中洛外図に描かれた神社の杜の植生を比較してみると、一部に例外はあるものの、共通性が大きい場合が多いことがわかる。表1は、その結果を簡略化してまとめたものである。このことは、それらの洛中洛外図では、描かれている樹木などの植物は一般にシンボリックなものであるとはいえず、神社付近の植生は当時の植生の実態をそれなりに反映して描かれている場合が多いことを強く示唆している。

これら三点の植生描写はかなり異なるため、それらの比較から、たとえば本殿付近にマツがあったかどうかなど、その神社付近の室町後期の植生を述べることは難しい。ただ、三点の図の景観年代は十数年から二十数年の開きがあるため、実際にその間に大きな植生景観の変化があった可能性も考えられる。



図59 三条の八幡
(歴博甲本洛中洛外図より)



図61 三条の八幡
(上杉本洛中洛外図より)



図60 三条の八幡
(歴博乙本洛中洛外図より)

表1 初期洛中洛外図に描かれた神社の植生とその共通性
(樹木の◎はとくに多い、○は多い、△は少ないことを示す)

図名 神社名	歴博甲本	東博模本	歴博乙本	上杉本	(共通性)
上賀茂神社	◎スギ、○マツ、落葉広葉樹、常緑広葉樹	○スギ、マツ、落葉広葉樹、常緑広葉樹		◎スギ、○マツ、広葉樹	大
下鴨神社		スギ、常緑広葉樹、落葉広葉樹		スギ、広葉樹、△マツ	大
今宮神社	○スギ、○常緑広葉樹、落葉広葉樹	○スギ、○常緑広葉樹		◎スギ、△落葉広葉樹	中
愛宕神社	◎スギ	◎スギ、△落葉広葉樹		◎スギ	大
平野神社	○落葉広葉樹、(○)マツ、常緑広葉樹			○マツ、広葉樹	中
北野天神	◎マツ、○スギ、ウメ、落葉広葉樹	◎マツ、スギ、ウメ、落葉広葉樹、常緑広葉樹	◎マツ、ウメ、スギ、落葉広葉樹	◎マツ、○スギ、○ウメ	大
吉田神社	◎常緑広葉樹、落葉広葉樹、(参道沿いはマツ)		スギ、マツ、常緑広葉樹、(参道の鳥居付近はマツ)	◎スギ、マツ、常緑広葉樹、落葉広葉樹	中
祇園社 (八坂神社)	○マツ、スギ、常緑広葉樹、落葉広葉樹	◎マツ、○スギ、広葉樹、△シュロ	◎マツ、落葉広葉樹	○マツ、○スギ、広葉樹、△シュロ	大
松尾神社	◎マツ (鳥居付近のみ)	○マツ、スギ、常緑広葉樹	○マツ、常緑広葉樹、落葉広葉樹	○マツ、スギ、常緑広葉樹、落葉広葉樹	大
七野社	◎落葉広葉樹、常緑広葉樹			常緑広葉樹、落葉広葉樹、マツ	大
三条の八幡	◎マツ、常緑広葉樹		マツ、常緑広葉樹、サクラ、落葉広葉樹	◎常緑広葉樹	小

表2 上杉本洛中洛外図に描かれた神社の社の樹木
 (表1記載分をのぞく)
 (樹木の◎はとくに多い、○は多い、△は少ないことを示す。)

	描かれている樹木
上御霊社	マツ、常緑広葉樹、落葉広葉樹
下御霊社	広葉樹 (常緑広葉樹が多い?)
五条の天神	マツ、落葉広葉樹
伏見稲荷	◎スギ
地主神社	○スギ、常緑広葉樹、落葉広葉樹
大將軍社	◎常緑広葉樹、△落葉広葉樹
天満宮	マツ、広葉樹
玉津嶋社	広葉樹 (常緑広葉樹が多い?)
神明社	マツ、落葉広葉樹
若宮の八幡	○スギ、マツ、落葉広葉樹
鞠の宮	マツ、広葉樹

そこで、図の比較考察ができない神社についても、それらの社がどのよう描かれているかを、参考までに見ておきたい。なお、ここで見る神社はすべて上杉本に描かれているものである。また、ここでも寺院内などにある鎮守社、神社の御旅所、小さな祠は対象外とする。

表2は、上杉本洛中洛外図に描かれたそれら神社付近に描かれた樹木について簡略にまとめたものである。その表からもわかるように、マツは大部分の神社の社に描かれている。ただ、マツがとくに多いという例はない。たとえば、図62は上杉本に描かれた上御霊社であるが、それでもマツは見られるものの、それがとくに多く描かれているわけではない。

一方、スギについては、それが神社の社の多くを占める描写となっているものがいくつかある。たとえば、伏見稲荷は、屏風の端のためわずかな描写しかないが、その社殿はスギのみの木立に囲まれるように描かれている(図63)。



図62 上御霊社
 (上杉本洛中洛外図より)



図63 伏見稲荷
 (上杉本洛中洛外図より)

また、常緑広葉樹が多い描写となっている神社の社もいくつかある。たとえば、大將軍社もその一つである(図64)。その社殿周辺は、一本の紅葉をした落葉広葉樹を除き、すべて常緑広葉樹のように見える。ただ、社殿右手(背後)の社の樹幹はすべてかなり通直であり、葉は常緑広葉樹のように見えるものの、実際はスギなどの針葉樹を描いている可能性もある³⁰⁾。また、下御霊社と玉津嶋社の広葉樹については、その多くが常緑広葉樹の可能性もある。

落葉広葉樹は、それがとくに多いところはないものの、多くの神社の社に描かれている。たとえば、五条の天神では、落葉広葉樹と見られる広葉樹がマツとともに多く描かれている(図65)。なお、その図には、ススキかハギと思われる低い植物も多く描かれている。

以上、図の比較考察ができない神社についても、比較考察が可能であった神社の場合と、その社の植生は概して似た傾向にあるように思われる。こうして、これらの洛中洛外図が描かれた時代における京都の神社林の概観が浮かび上がってくる。すなわち、当時、神社の社の植生は一様ではなく、神社により大きく異なっていたとはいえ、全体的にマツがある程度は見られる場合が多く、北野天神や祇園社のように、その割

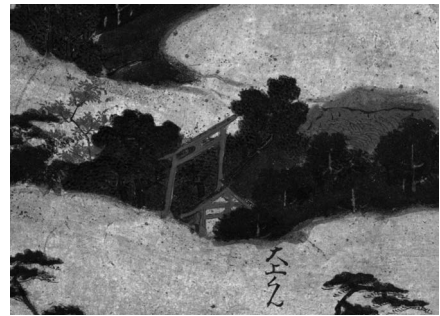


図64 大將軍社
(上杉本洛中洛外図より)

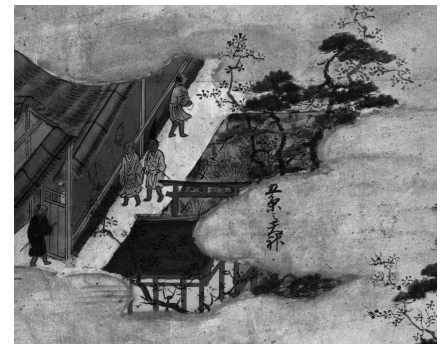


図65 五条の天神
(上杉本洛中洛外図より)

合が大きかったと思われる神社がある。その一方で、今宮神社や愛宕神社などのように、中にはマツがないか少なかったと思われる神社もある。また、スギも神社の杜の重要な樹種であった場合が多く、中には愛宕神社や伏見稲荷のように図にスギしか描かれておらず、スギがかなり多かったと思われる神社もある。一方、七野社や大將軍など、杜に常緑広葉樹の割合が大きかった可能性のある神社もある。

おわりに

本稿では、大正初期と明治末期の古写真、また幕末と室町後期の絵図類を主な資料として、それぞれの時代における神社の杜の植生がどのようなものであったかを考えた。その結果、かつての神社の杜の植生景観は、一部に例外的なものもあるが、スギやマツなどの針葉樹が重要な樹木として多く存在する傾向があったと思われる。また、絵図類では樹木がシンボル化されていることが多いために、わかりにくいのが、明治期から大正期の古写真で見ると、かつての神社付近の樹木は、今日よりも少なく、また小さいことが多い傾向があった。このように、ここで検討し

たかつての神社の杜の多くは、今日とは大きく異なっていたと考えられる。

こうした傾向は、『偵察録』などからわかる関東の神社の例でも共通するところがある。このように、関東や関西を含む日本南部のかつての神社の杜は、一部には常緑広葉樹あるいは落葉広葉樹が主たる樹木であったところもあると考えられるとはいえ、今日多く見られる照葉樹中心の杜は少なかったと考えられる。京都の神社の例などから考えると、そのような神社の植生景観の起源は、室町後期よりも前に遡る可能性が高い。こうして、照葉樹林が多い神社の杜の景観は、一般に比較的新しい景観であるということが、より確かになってきたように思われる。

しかし、そのように比較的新しい植生景観を、これまで古くからあったと見る見方が支配的であったのはなぜなのだろうか。その詳細な研究は今後待つことになるが、それにはいくつかの理由があるように思われる。たとえば、その一つの理由として、一九七〇年代頃の原生的自然を至上とするような自然保護の潮流の影響も考えられる。その頃、ある期間あまり手を加えられることがなかったために、比較的自然度が高かった神社の杜は、潜在自然植生（それぞれの地域における原生的自然）を考える上でたいへん注目されていた。⁽³⁾あるいは、数十年から百年ほどの期間でも驚くほど大きくなることもある一方、一〜二年ではたいした変化もなく、昔から今の状態がずっとあったと思わせてしまうこともよくある樹木の特性が、そうした誤った認識を生んできた別の要因の一つかもしれない。

一方、ここ百年ほどの間に、神社の杜の植生が大きく変わってきた一つの理由として、明治維新以降、神道国教化政策により神社の重要性が大幅に増し、その風致を高める政策がとられたことがある。それに関連する法令類として、たとえば下記のものがある。

■明治六年七月（一八七三）太政官第二三五号布告「社寺境内ノ樹木ハ假令其社寺修繕等ニ相用ヒ候共猥ニ伐木不相成候若シ難止事情有之節ハ其地方廳へ願出許可ヲ可受事」

■明治七年十二月（一八七四）内務省達乙第七五号「社寺現境内上地ノ山林及境内地ノ樹木伐採セサル様注意セシム」

■明治十五年（一八八二）九月十五日京都府布達「社寺境内樹木ノ義ハ元來修繕等ノ爲培植候モノニ無之候處近來多分ノ伐木願出數百年來ノ古木一朝地ヲ拂ヒ遂ニ風致ヲ毀損スル向モ不少候條自今社ハ本殿拜殿寺ハ本堂庫裡等造修ノ爲不得止モノニ限り風致自ヲ除クノ外目通り壹丈以下五尺以上ハ總數十分ノ一五尺以下一尺以上ハ同シク十分ノ二以内壹尺以下ハ生立ノ爲拔伐ニ限り別紙ノ廉々取調可願出右其區郡内社寺へ告示可致此旨
相達候事

（別紙）

- 一 造修ノ旨趣並ニ仕様書ノコト
- 一 境内官有地又ハ民有地ノ別
- 一 同寸尺樹木ノ總數
- 一 伐採スヘキ樹木ノ位置」

このように、神社の杜の樹木が伐りにくくなったことは、植生の遷移の進行を助けることになった。そして、それによりマツなどの陽樹は早く消えてゆくことになった。一方、スギも大気汚染や都市化による地下水の変動で枯れてゆくものが少なくなかった⁽³²⁾。

また、常緑広葉樹があえて多く植樹されるようになったことも、鎮守の杜に常緑広葉樹が増える原因となったと思われる。たとえば、東京の

明治神宮は、明治天皇の没後、大正初期に創建された比較的新しい神社であるが、その植樹に際しては、当初スギ・ヒノキなどの針葉樹中心の案であったが、それらの樹種はよい環境下では最適の樹種と考えられたものの、大気汚染に弱い⁽³³⁾ため、東京の風土・気候に適し、各種危害に抵抗強く、また人手による補植を必要としないなどの理由から、カシヤシイヤクスノキなどの常緑広葉樹を杜の中心的樹種とする案になったとい

う。⁽³³⁾
とはいえ、神社の中には、珍しい巨木や樹種があり、早くから天然記念物などに指定される杜をもつところもあった。本稿で取り上げた奈良県の妹山（大名持神社社叢）もそうしたところで、長く入山を禁止されてきたとされる。しかし、それは上述の通り、全面的に長く「入らずの杜」であったのか疑わしいところがある。また、神社の杜の変遷について考えるために、ここ一二年の間に、妹山のほかにも天然記念物などに指定されている立派な杜をもつ神社をいくつか訪ねる機会があったが、それらの杜でも同じように感じるが多かった。

たとえば、新潟県柏崎市にある宮川神社には、その裏山にシロダモなどの大木があるため、国指定の天然記念物となっている社叢（写真40）がある。その裏山は海岸に近い低い山であり、シイやカシの北限に近いとはいえ、もし長く手が付けられていなければ常緑広葉樹がかなり多いはずのところである。しかし、ケヤキなどの落葉樹やスギがかなり多く、百年から二百年ほど前までは、少なからず人の影響があったのではないかと思われる。

あるいは、同じ新潟県の糸魚川市にある能生白山神社にも、その付近では珍しいアカガシなどがあり、昭和十二年（一九三七）に国指定の天然記念物に指定された社叢がある。しかし、ここではアカガシはさほど多く見られず、またケヤキなどの落葉樹が目立つところもある。さらに、林内にはちょうどその杜が天然記念物に指定された頃から生育したかと



写真40 宮川神社裏山の社叢
(2006年3月撮影)



写真41 能生白山神社社叢のフジ蔓
(2006年3月撮影)

思われるほどの太さのフジが多く見られるところもある(写真41)³⁴。それらのことから、その社叢もかつて実際には人手がある程度入っていた山である可能性が高いように思われる。

また、大木があり南方熊楠がたいへん喜んだという闘雞神社(和歌山県田辺市)も訪れる機会があった。そこには確かに今もクスノキの大木が何本か境内にあるものの、今の社叢にそうした巨樹が占める割合はさほど大きくはない。そうした現状からは、熊楠の時代にそこに巨樹がその杜の多くを占めていたことは考えにくい。

いずれにしても、一部に例外的なものはあるかもしれないが、鎮守の杜も、これまでしばしば言われてきたように固定的なものではないことは明らかであろう。神社には古い史料の残るところも多いため、今後、東京都府中市の大国魂神社のように、過去の杜の実態が詳しく明らかになるところが増え、鎮守の杜についての、より正しい認識が広まることを期待したい。

なお、これまでの一般的な鎮守の杜の見方には誤った部分があったと考えられるが、そうした誤った見方を基に考えられている日本の潜在自

然植生や自然観についての見直しも、今後必要になるかもしれない。鎮守の杜が、日本の自然を考える一つの重要なベースであることには変わりはない。

最後に、本稿をまとめるにあたり、国立歴史民俗博物館、東京国立博物館、米沢市上杉博物館には、それぞれの所有する貴重な洛中洛外図の写真使用を快く許可していただいた。ここに深く謝意を表する次第である。

註

- (1) ここでは、比較的小さな神社の杜から諸国の一宮などの大きな森林まで含めて「鎮守の杜」とする。
- (2) たとえば、「探求「鎮守の森」上田正昭編(二〇〇四)では、「入らずの森」にはどんな木があるの?」との問いに対し、落葉樹や針葉樹ではなく、ツバキ、カシ、シイ、クスノキなど常緑広葉樹が多く、その多くが「聖樹」として尊ばれてきたこと、また、いまだでは照葉樹は、鎮守の杜以外にはあまり見られなくなってきたとしている。
- (3) 小椋純一「植生からよむ日本人のくらし」(雄山閣出版 一九九六)
- (4) 前記註(3)に同じ。
- (5) 原田洋・磯谷達宏「マツとシイ」(岩波書店 二〇〇〇)
- (6) 国立歴史民俗博物館編「日本の神々と祭り―神社とは何か?―」(国立歴史民俗博物館 二〇〇六)
- (7) 鳴海邦匡・小林茂「近世以降の神社林の景観変化」(歴史地理学四八一―二〇〇六)
- (8) 大内規行・中村克哉「大国魂神社社叢の研究」(府中市教育委員会 一九九三)
- (9) 註(7)に同じ。
- (10) 註(6)に同じ。
- (11) 註(6)に同じ。
- (12) 註(6)に同じ。
- (13) 京都府編「京都府誌」(京都府 一九一五)
- (14) 田山宗堯編「日本写真帖」(ともろ商会 一九二二)
- (15) 近年の地形図とは異なり、植生が詳しく記されている。京都周辺の大部分は、明治三二年(一八八九)に測図されている。
- (16) 明治十年代にまとめられた「皇国地誌」の副本。京都府立総合資料館蔵。

- (17) 仮製地形図の樹木の記号は大と小に分けられている。大小の区分は、『京都府地誌』など、当時の文献との比較から、五メートル程度の高さがその境であったものと考えられる。そのことは、註(24)の文献に詳しい。
- (18) 京都近郊では、東山中央部など、社寺林および明治初期に上地された旧社寺林を中心にシイ林化が進んでいるところが多い。詳しくは、次の拙論など参照のこと。
- 小椋純一「京都近郊の保護林における植生遷移に関する一考察」(『木野評論』第二〇号所収 一九八九)
- 小椋純一「岩倉周辺のシイ林の分布とその拡大について」(『洛北岩倉研究』第四号所収 二〇〇〇)
- (19) たとえば鎌倉大仏の背後の樹林では、かつて樹高の高いマツが目立っていたが、近年はマツが消え、マツ林に代わった照葉樹林の高さは、かつてのマツの高さよりかなり低くなっている。註(3)の文献など参照のこと。
- (20) 鴨社絵図および賀茂御祖神社境内全図。両図とも、財団法人礼の森顕彰会編『鴨社古絵図展』(財団法人礼の森顕彰会 一九八五)に図が掲載されている。
- (21) 水川神社での聞き取りによる。
- (22) こうしたヒノキの性質は、たとえば、木曾のヒノキ林、あるいは京都東山中央部のヒノキ林でも観察することができる。
- (23) 註(6)に同じ。
- (24) 小椋純一「絵図から読み解く人と景観の歴史」(雄山閣出版 一九九二)
- (25) 京都国立博物館編『洛中洛外図』(淡交社 一九九七)
- (26) 註(25)に同じ。
- (27) 註(25)に同じ。
- (28) 註(24)に同じ。
- (29) 註(24)に同じ。
- (30) こうした大きな屏風の制作には何人もの画工が関わっていると考えられることから、同じ樹種でも屏風の部分によってやや異なった描法で描かれることもあるものと思われる。
- (31) この頃、『社寺林の研究』(第一―二二号 緑地研究会編)に代表されるように、全国的に多くの社寺林が調査され、その報告書が作成された。
- (32) 東京都府中市の大国魂神社でも、昭和三〇年代頃までに多くのスギが枯れていった。前記註(8)参照。
- (33) 明治神宮境内総合調査委員会編『明治神宮境内総合調査報告書』(明治神宮社 務所 一九八〇)
- (34) フジは、山に人手が入らなくなると増えることがよくある蔓性の樹木である。そのため、フジの樹齢は、人が森林に手を加えなくなった時期を知る手がかりになる。

(京都精華大学人文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇〇八年六月一七日受理、二〇〇八年七月二九日審査終了)

The History of Shrine Groves Viewed from Old Photographs and Pictures

OGURA Jun'ichi

Today, broad-leafed evergreen forests are typical of shrine groves in southern Japan, including the low-lying parts of the Kanto region. It is commonly believed that these shrine groves have continued since ancient times with little human intervention. However, a study based on documents, topographical maps and photographs from the Meiji period onward has revealed that this common assumption is very likely mistaken. However, since not many examples have been studied so far, it has been necessary to examine many more examples in order to describe the general type of vegetation that grew in shrine groves of days gone by. In the study presented here, the author examined the vegetation of shrine groves in earlier times using old photographs and pictures as main sources.

Old photographs of shrines found in "Books about Kyoto Prefecture" and "Photo Album of Japan," published in 1915 and 1912 respectively, were examined and compared to today's woods. Although the vegetation shown in these photographs was largely unchanged in the case of some shrine groves, in most cases the differences between then and now are considerable. That is to say, whereas today it is common for broad-leafed evergreen woods to consist of *Cinnamomum*, *Castanopsis* and *Quercus* species, in the early Taisho period it was common for conifers such as Japanese cedar and pine to be the main trees. What is more, there were fewer trees than there are today around a shrine, and those that grew there were smaller than their contemporaries.

Pictures from varying periods were studied to determine the vegetation that once existed at shrines and different pictures of the same shrines from the same periods were checked in order to verify the realism of the source pictures. These include a collection of drawings published in 1864 known as the "Saisen karaku meisho zue" ("Reselected Pictures of Famous Places in Kyoto") and four early folding screens of Rakuchu and Rakugai (Kyoto) painted from the early to the middle of the 16th century. This study revealed that the vegetation in shrine groves in those days was not necessarily uniform and varied greatly depending on the shrine. In general, pine trees were visible to a certain extent in many places and there were also many instances where Japanese cedar was the main type of tree. There were also some shrines where broad-leafed evergreen trees comprised a large proportion of the trees.
